３．記録からわかる長者森古墳と太田森２号墳の出土品

はじめに

福知山市夜久野町域（以下、夜久野地域）では、決して少なくない古墳が発見されているものの、発掘[(1)]により実態が明らかになった例は限られている。それらの発掘内容は、夜久野史友会の刊行物や村史、展示図録等で公表されてきており（表１）、出土品は現在、福知山市夜久野町化石・郷土資料館（以下、資料館）に展示・保管されている。

今回、資料館所蔵遺物の再調査に合わせて、古墳に関する文献記録の把握と現存する出土遺物との照合をおこなった。本稿では、出土遺物の報告をおこなう長者森古墳と太田森２号墳を中心にその成果を報告する。

なお、古墳の名称は原則として京都府遺跡地図に従うこととするが、長者森古墳（長者森１号墳）については京都府指定文化財（史跡）としての名称を用いる。

１．長者森古墳

（１）長者森古墳の文献記録（表２）

1950年代の記録　　長者森古墳について初めて言及があるのは、『天田郡中夜久野村沿革史（未定稿）』（1956年、以下『沿革史』）である。ここでは中夜久野小学校（当時旧福知山市立育英小学校）の校庭にかつて豪族夜久氏の屋敷、いわゆる「長者屋敷」があったという伝説とともに、「現に屋敷趾には古墳一を留むる耳なれ共その昔山ろくに数所なりしと傳ふ。」と述べている。そして、以下のような古墳の概要が示されている（図１）。

位置　天田郡中夜久野小学校校庭

沿革

比較的大規模にして然も散在し発掘物等より推測せば　氏族制以前のもの　即ち大化以前のものたる事は疑うべからず

（大化というも画然区別せるに非ず　その前後二、三十年間をいう）

古墳の夜久氏との関係あるや否や不明なり

現状　古考学者の一資料として識者の視察する者多し

・羨道　長　約十八尺

上面　三枚の大石にて蔽う

・槨内　長　約十八尺

幅　下方約八尺

表１　夜久野地域の古墳に関する文献記録

文献	概要
夜久野史友会1956 『史の友』第１集	「大田森彼岸塚古墳中間報告」（附図其の１～６を伴う）を掲載
天田郡旧中夜久野村1956 『天田郡中夜久野村沿革史（未定稿）』	長者森古墳発掘の経緯と内容について記述
夜久野史友会1957『史の友』第７集	「彼岸塚古墳報告」、「夜久野地方の古墳」を掲載 ・「彼岸塚古墳報告」は1956年中間報告から内容の更新がある。 ・長者森古墳についての記述は1956年『沿革史』の内容を転載する。 ・長者森古墳および石切場出土品の略図を掲載する。
下夜久野村誌刊行委員会1961 『下夜久野村誌』	「彼岸塚古墳報告概要」を掲載 ・1957年報告と同一内容で、昭和32年に京都府に提出した報告書に基づく。
夜久野町教育研究会1966 『郷土夜久野歴史篇　付地誌篇』	「彼岸塚古墳報告概要」、「夜久野地方の古墳」を掲載 ・「夜久野地方の古墳」は1957年版に「流れ尾古墳」（昭和36年発掘調査）、「古墳期の分類と特徴及び当時の社会」を追記する。
上夜久野村史刊行委員会1972 『京都府上夜久野村史』	「当地で発掘された古墳」、「夜久野地方の古墳」を掲載 ・「当地で発掘された古墳」には彼岸塚古墳発掘調査の概略および長尾古墳・流尾古墳の報告書（昭和44年に京都府に提出）の抜粋が含まれる。 ・「夜久野地方の古墳」は1966年版に長尾古墳・流尾古墳等を追記する。
京都考古刊行会1975 『京都考古』第16号	「福知山地方の横穴式石室」（海老瀬敏正・笠井敏光）にて長者森古墳に言及するとともに石室実測図を掲載する。
京都府立丹後郷土資料館1976 『丹波夜久野の文化財』	下記古墳の概要と出土品写真等を掲載 ・長者森古墳の石室実測図（『京都考古』掲載図の転載）と出土品写真 ・太田森２号墳出土品写真 ・長尾古墳出土土器写真 ・流尾古墳出土品および石室写真
夜久野町教育委員会1981 『京都夜久野の文化財』	下記古墳の概要と出土品写真等を掲載 ・長者森古墳の墳丘、石室写真 ・太田森２号墳出土品写真 ・長尾古墳および流尾古墳の出土品・遺構写真
京都府埋蔵文化財調査研究センター1982 『京都府埋蔵文化財情報』第６号	府下遺跡紹介として「長者森古墳」（小池寛）を掲載 ・『京都考古』掲載の石室実測図を転載
山城考古学研究会1983 『丹波の古墳Ⅰ―由良川流域の古墳―』	長者森古墳・長尾古墳・流尾古墳について記述 ・長者森古墳の石室実測図（新規）を掲載 ・長尾古墳・流尾古墳の出土品実測図は1972年掲載図を転載
京都府教育委員会1987 『京都府遺跡地図』第２版	古墳として、「夜久野地方の古墳」（1972年版）掲載以外に小倉田古墳等
京都府教育委員会2001 『京都府遺跡地図』第３版	長谷古墳等の追加
夜久野町2006 『夜久野町史資料編』	「夜久野地方の古墳」等を基に町内の古墳の概要を列記
福知山市2013 『夜久野町史』第四巻（通史編）	夜久野町域の古墳時代の概要について記述 ・長者森古墳の墳丘測量図、石室実測図を掲載 ・竹ノ内古墳群、千切塚古墳群の地形測量図を掲載

上方約六尺

高さ　約八尺五寸

上面　五大石にて蔽う

下面　地面一四四平方尺余

・本古墳用石材は殆んど火成岩にして、中には一坪に余るものもあり　その後この石材は村人により諸所に使用せられ　井戸蓋　或は庭石等とせるものあり

・発掘物

金環　直圣約五分　上面のみ金

管玉　直圣約三分長さ一寸余緑色に出雲玉石

馬具　鐙止メ

刃剱直刀一本錆生じ腐蝕しつつあり

土器　盤、坏、蓋坏、等

（以上　中夜久野小学校蔵）

小学校校庭に残存すること、石室規模や天井石の個数がおおむね一致することから、この文献のい

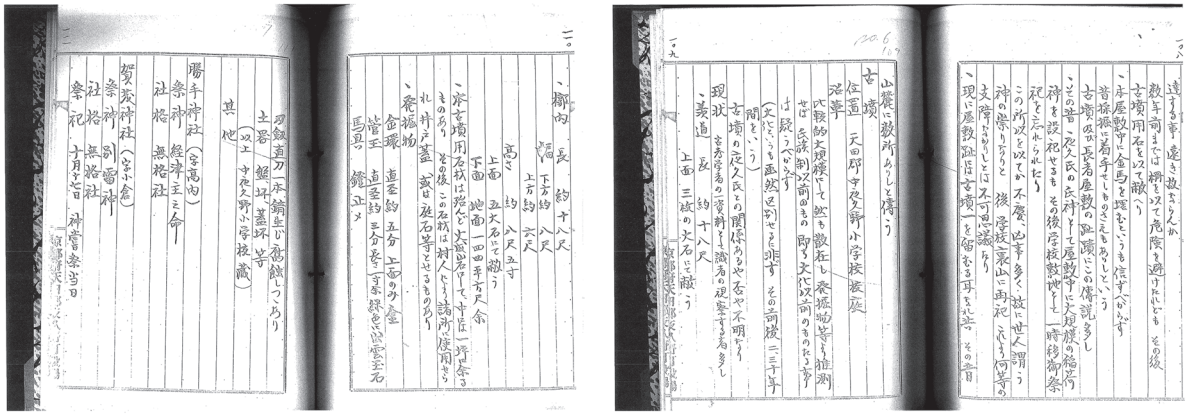

図１　『天田郡中夜久野村沿革史』における長者森古墳についての記述

表２　各文献記録における長者森古墳出土品についての記述

文献	出土品についての記述	掲載図・写真
夜久野史友会1956 『史の友』第１集	—	—
天田郡旧中夜久野村1956 『天田郡中夜久野村沿革史（未定稿）』	「金環　直径約五分　上面のみ金 管玉　直圣約三分長さ一寸余緑色に出雲玉石 馬具　鐙止メ 刃剣直刀一本錆生じ腐蝕しつつあり 土器　盤、坏、蓋坏、等 （以上　中夜久野小学校蔵）」	—
夜久野史友会1957『史の友』第７集	「金環　直径約五分　上面のみ金 管玉　直径約三分長さ一寸余　緑色にして出雲玉石 馬具　鐙止め　さび生ず 刀剣　直刀一本 土器　盤、坏、蓋坏等 （以上　中夜久野小学校蔵）」	出土品の模式図を掲載し、以下の注記を添える 「１．武具　鉄製鉾　一口 ２．〃　　刀剣　一口乃至二口（腐蝕破損甚しく原形を留めず復元不可 ３．装身具　金張銅地　耳環一箇 ４．土器　祝部式　盌　完形10　不完形１」
下夜久野村誌刊行委員会1961 『下夜久野村誌』	—	—
夜久野町教育研究会1966 『郷土夜久野歴史篇　付地誌篇』	※副葬出土品（別記）とのみ記され、内訳の記述はない	—
上夜久野村史刊行委員会1972 『京都府上夜久野村史』	「刀剣、耳環、須恵器」	—
京都考古刊行会1975 『京都考古』第16号	「なお、小学校保管の長者森古墳出土とする馬具・素環頭刀子などは他の古墳から採集されたもので、長者森古墳の遺物は散逸して伝えるところがない。」	—
京都府立丹後郷土資料館1976 『丹波夜久野の文化財』	—	「育英小学校校庭・須恵器」として、須恵器杯身２点と有蓋高杯１点の写真を掲載する
夜久野町教育委員会1981 『京都夜久野の文化財』	「整地中に双円墳が発見され、そのうち１基は築山として今日まで保存されてきた長者森古墳であり、その玄室も当時のまま保存され出土品も保管されている。」	—
京都府埋蔵文化財調査研究センター1982 『京都府埋蔵文化財情報』第６号	「出土遺物は直刀、馬具、金環等の出土が伝えられているが真偽は不明である。（中略）伝出土遺物は、夜久野町郷土資料館に保管、展示されている。」	—
山城考古学研究会1983 『丹波の古墳Ⅰ―由良川流域の古墳―』	「なお、小学校に須恵器・馬具・素環頭刀子などの遺物が保管されているが、本古墳に伴うものではないらしい。」	—
京都府教育委員会1987 『京都府遺跡地図』第２版	「直刀、馬具、金環、素環頭刀子、須恵器」	—
京都府教育委員会2001 『京都府遺跡地図』第３版	「鉄刀、銀環、須恵器」	—
夜久野町2006 『夜久野町史資料編』	「遺物は、須恵器の坏類、鉄刀類が出土している」	「長者森古墳出土遺物」として須恵器蓋杯２組の実測図を掲載する
福知山市2013 『夜久野町史』第4巻通史編	—	—

う「古墳」が長者森古墳に該当し、他にもかつては数基の古墳があったことがうかがわれる。

これと同様の記述は、翌年に刊行された『史の友』第７集にもみられる[(2)]。くわえて、その古墳を「長者古墳」と称し、明治37年の小学校の校地整備に伴い発掘されたと記している。

また、「明治37年　中夜久野小学校々庭内長者古墳出土品　昭和三十二年七月二十五日調」として、土器11点の俯瞰図および側面図、馬具・耳環・鉄器の平面図と以下の注記を記している（図２）。

１．武具　鉄製鉾　一口

２．〃　　刀剣　一口乃至二口（腐蝕破損甚しく原形を留めず復元不可）

３．装身具　金張銅地　耳環一箇

4．土器　祝部式　盌　完形10　不完形１

なお、同ページに直刀の平面図も掲載しているが、これについては以下のように注記がある。

上記の（図示）他に完形長刀一口、鉾一口、古鏡一箇が保管されているが、記録に「古刀剣は大正十三年石山にて発掘せるもの、的場仁右衛門氏寄贈」とあり、同所川向い南方、夜久野ヶ原石切場附近古墳より出土したものであるから館古墳出土品に含まない。尚、鉾及び古鏡も共に当古墳に属さない。

1960年代以降の文献　その後、『郷土夜久野歴史篇』（1966、以下『郷土夜久野』）や『上夜久野村史』（1972）では、「夜久野地方の古墳」のなかで、長者森古墳として『沿革史』と同様の内容が記されている。

石室の実測図の初出は『京都考古』第16号（1975、以下『京都考古』）となる。床面平面図と奥壁・右側壁の立面図が示され、出土品については、「小学校保管の長者森古墳出土とする馬具・素環頭刀子などは他の古墳から採集されたもので、長者森古墳の遺物は散逸して伝えるところがない。」としている。「素環頭刀子」とは、『史の友』第１集で「鉄製鉾」として紹介された鉄製品のことと思われる。

翌年に刊行された『丹波夜久野の文化財』（1976、以下『丹波夜久野』）では、上記の石室実測図とともに「育英小学校校庭・須恵器」として受け部をもつ杯身２点と有蓋高杯１点の写真が掲載されている。『京都夜久野の文化財』（1981、以下『京都夜久野』）では石室の写真を掲載し、「整地中に双円墳が発見され、そのうち１基は築山として今日まで保存されてきた長者森古墳であり、その玄室も当時のまま保存され出土品も保管されている。」と紹介している。

さらに『京都府埋蔵文化財情報』第６号（1981、以下『情報』）は、1975年発表の実測図とともに「出土遺物は直刀、馬具、金環等の出土が伝えられているが真偽は不明である。」としている。

『丹波の古墳Ⅰ』（1983、以下『丹波の古墳』）では、左側壁の立面や羨道方向の見通し図も加えた新たな石室実測図が掲載されている。出土品については、「小学校に須恵器・馬具・素環頭刀子などの遺物が保管されているが、本古墳に伴うものではないらしい。」とする。

それ以降に刊行された京都府遺跡地図では出土品として「直刀、馬具、金環、素環頭刀子、須恵器」あるいは「鉄刀、銀環、須恵器」と記しており、『夜久野町史第二巻　資料編』（2006、以下『町史資料編』）では出土品として「須恵器の坏類、鉄刀類」を挙げ、受け部をもつ杯身および蓋２組の実測図を掲載している。

石室の記録の変遷（図３）　上記の文献のうち、『沿革史』、『上夜久野村史』には石室の規模等が文章で記されている。『沿革史』は尺貫法を用いるものの、玄室規模は『上夜久野村史』とほぼ同じである。羨道長は『沿革史』の方が２m以上長く記録されているが、羨道天井石の個数が現存するものと同じことから、羨道自体に変化はないと思われる。現存する羨道からみて、『沿革史』は床面

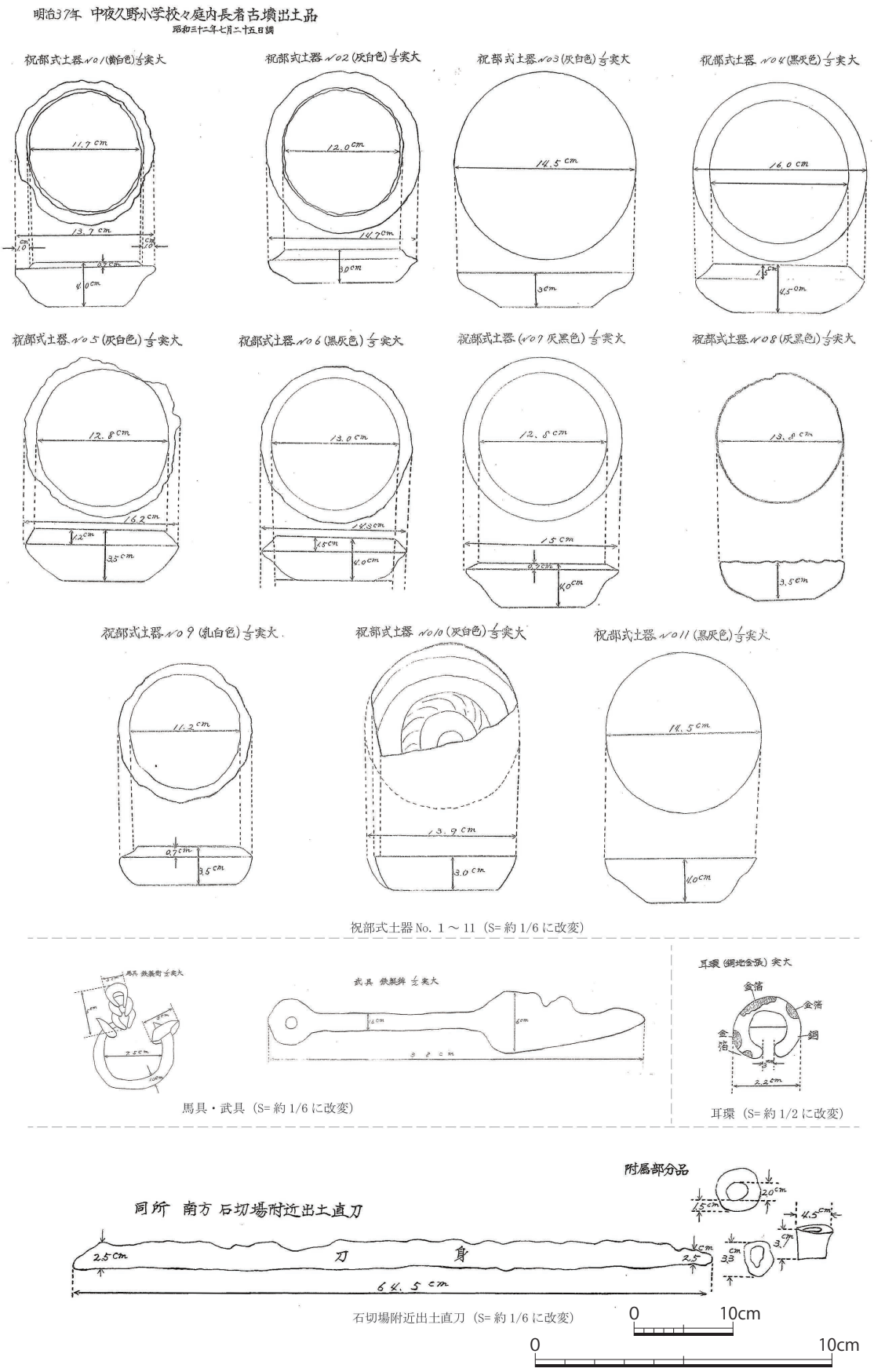

図２ 『史の友』第７集に長者森古墳出土品として掲載された図（夜久野史友会 1957）

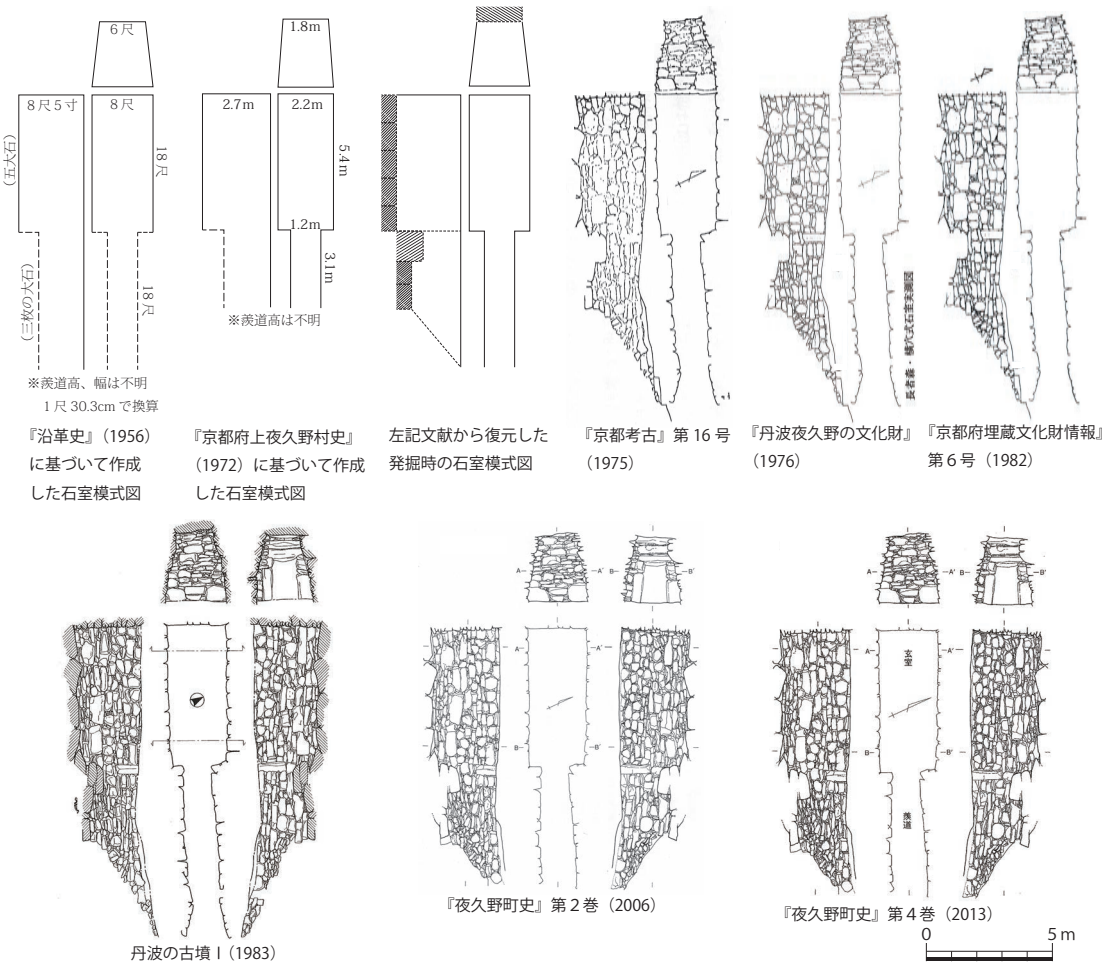

図３　文献記録から復元される長者森古墳の石室と既往の実測図（S=1/300）

での羨道長、『上夜久野村史』は天井での羨道長を示している可能性が高い。

上記以降の文献には、以下の３種類の石室実測図が確認される。

①床面、奥壁と右側壁のみを描く：『京都考古』、『丹波夜久野』、『情報』

②床面、奥壁、右側壁に左側壁と玄門見通し図をくわえる：『丹波の古墳』

③作図箇所は上記と同じだが羨道部をやや短く描く：『夜久野町史』

このうち①と②は全体的な描写は似るものの、楣石を中心に天井石断面の描写が異なることから、②は①に作図箇所を追加するだけでなく、既存の図面にも描き直しをしている可能性がある。③と①・②の違いは左袖部平面の描写に顕著で、これは断面の作図位置の違いとみられることから、③は全体も実測し直したものと思われる。

さて、これらのうち①・②と③では羨道の長さが異なる。現存する羨道は①・②と同じく、全長が２mを超え、端部がバチ形に開く。③はこのバチ形の部分を当初のものでないと考えて作図したと思われる。上述のように『沿革史』のいう羨道長を床面での長さとすると、③の羨道長が発見当初の記録と合致することとなる。

文献にみえる出土品　各文献に共通する出土品としては耳環１点、管玉１点、馬具（鐙）１点、鉄

刀少なくとも１点、須恵器複数点がある。須恵器については『沿革史』ではいくつかの器種があるように表現されているが、『史の友』には杯身や蓋11点の図面が掲載されているのみである。この11点には杯と組み合う蓋の有無や口径に差があるため、『沿革史』ではそれらを異なる器種として表現した可能性もある。なお、『丹波夜久野の文化財』で掲載されている有蓋高杯は『史の友』には記載がない。

ほかに、『史の友』で「鉄製鉾」とされる鉄製品がある。後年の文献のいう「素環頭刀子」と同じものと思われるが、最も古い記録である『沿革史』には記述がない。特徴的な形状であることから認識されていないことは不自然であり、古墳発掘時の出土品とみなすには疑問がのこる。

なお、『京都考古』とこれを参考文献とする『情報』、『丹波の古墳』は出土品の信憑性を疑っているがこれらは発掘年に近い記録である『沿革史』や『史の友』は参考文献として挙げておらず、根拠は不明である。上述の出土品であるかが疑わしい遺物の存在からの指摘と思われるが、少なくとも発掘年に近い記録に共通する遺物を出土品と評価しない根拠は見当たらない。

（２）現存する出土品

2023年12月現在、郷土資料館では鉄刀２本と須恵器蓋杯11組が長者森２号墳出土品として展示されている。須恵器には「館塚出土　祝部式土器　明治37年」というラベルとともに「昭.32.7.25」の墨書の注記がのこる（図４・５）。『史の友』第７集で長者森古墳の別名として「館古墳」という名称がみられること、明治37年は長者森古墳の発掘年であり、昭和32年７月25日は『史の友』の図面作成日と一致することから、『史の友』で長者森古墳出土品として記載されたものと同一と考えてよいだろう。

鉄刀２点については、うち１点は長者森古墳出土品、もう１点は石切場出土品と思われる。『史の友』には石切場附近出土の鉄刀の図が描かれているが、その全長は２点のいずれとも一致しない。ただし、図の刀装具の形状が現存品の長い方に似る。現存品はかなりの補填が施されており、保存・修復処理過程において全長が変わった可能性がある。また、太田森２号墳として兵庫鎖環状轡が展示されているが、『史の友』掲載の図面との整合性からみて長者森古墳から出土した「馬具　鐙止メ」に

図４　展示須恵器のラベル

図５　展示須恵器の墨書注記

あたると考えられる。

収蔵庫にはヘラ状鉄製品とそれに伴う鉄環、さらに耳環が木箱に収められている。前者は「鉄製鉾（素環頭刀子）」、後者は『沿革史』のいう金環にあたると考えられる。なお、耳環の木箱の墨書には「管玉」の記述もあるが、現在、管玉は同梱されていない。

２．太田森２号墳

（１）太田森２号墳の発掘調査に関する文献記録

発掘の経緯と経過　　太田森２号墳の発掘調査の経緯と成果は『史の友』第１集に「彼岸塚古墳発掘調査中間報告」、『史の友』第７集に「彼岸塚古墳報告」として掲載されている。それによれば1956年に衣川悦夫氏所有の畑地で夜久野史友会会員が古墳の可能性がある石材を確認、その後衣川氏が同地で直刀２口を発見したことで古墳の存在が明らかになった。同年、夜久野史友会会員を中心に発掘調査が実施されている。

検出された遺構（図６）　　発掘調査では、まず「畑土」（耕作土）を90～120cm掘削したところで、土師器が出土している。土師器は羨道部で多く出土しており、この土師器を含む層の15cm程度下方で若干固い「底土」が確認されている。底土上の玄室口から中央部にかけて、炭や赤褐色土、黒色土が認められ、玄室中央部では炉のように石を丸く配した中に甕の破片が見つかっている。この炉跡と思われる遺構は古墳としての利用が終わったのちの二次利用と考えられることから、「固い底土」が１つ目の遺構検出面であり、その上層は二次利用に伴う遺物を含んだ包含層とみてよいだろう。

発掘調査でもこれらの遺物は古墳本来のものではないと判断し、さらに45cm程度掘り下げ、「黒色腐蝕土」に到達している。この黒色腐蝕土から「祝部式　土器・鉄器」が出土し、10cm程度掘削したところで「堅い砂礫の赤土」とその上面に石室の石材が並ぶことが確認されている。このことから、「堅い砂礫の赤土」が石室構築に伴い整地された基盤層ないしはその上層の整地層で、上面が埋葬時の利用面と考えられる。『史の友』第１集には遺構に関する図面が掲載されており、遺物の出土状況も描かれている（図７～９）。それによれば、左右の壁沿いに鉄器類があるほかは目立った規則性はなく出土しているようである。また、赤土上では多数の石が見つかっており、既往の記録ではそれらが平行して並ぶことから棺台のための石材とみなしている。こちらも石材の出土状況図がある

<table>
<tr><th rowspan="2">層序（推定）</th><th colspan="3">文献における記述</th><th colspan="2">遺構</th><th colspan="4">出土遺物</th></tr>
<tr><th>土層・土質</th><th>深度
（中間報告）</th><th>深度
（報告）</th><th>遺構面</th><th>遺構等</th><th>羨道部</th><th>玄門部
付近</th><th>玄室
（玄門側）</th><th>玄室
（奥壁側）</th></tr>
<tr><td>耕作土（表土）</td><td>畑土</td><td>４尺</td><td>90～120cm</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>第１包含層</td><td>包含土
（畑土と大きく
変わらない）</td><td>５寸</td><td>15cm</td><td rowspan="2">第１遺構面
（二次利用）</td><td rowspan="2">炉跡</td><td>燈油状の土師皿</td><td></td><td>甕形の土師器</td><td></td></tr>
<tr><td>堆積土</td><td>粘り気のある赤土</td><td rowspan="3">１尺８寸</td><td rowspan="2">45cm</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>堆積土</td><td>砂礫混合土層</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>第２包含層</td><td>黒色腐蝕土質</td><td>10cm</td><td rowspan="2">第２遺構面
（埋葬時）</td><td rowspan="2">敷石or
棺台石</td><td>右壁：皿</td><td>右壁：盌２個、銙、直刀
左壁：轡</td><td>管玉、耳環</td><td>高杯</td></tr>
<tr><td>基盤層</td><td>堅い砂礫の赤土</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
</table>

図６　文献の記述から復元される太田森２号墳の層序模式図

が、図上では棺位置を推定できるほどの並びは見出せないため、棺台石であるか敷石の散乱したものであるかは判断できない。

また、石室の規模は、全長５m34cm、玄室長３m12cm、玄室幅１m55cm、羨道長２m22cm、羨道幅95cmとされる。石室の高さについては、かつては１m60cm程度であったと紹介されている。玄門部は右袖部が36cm突出していたようで、図でもその描写がある。石室立面図をみると、両袖部に壁面の石積み２段分と対応する程度の縦長の石材が描かれていることから、左袖部にもわずかな突出があったか、袖部を意識した構造であった可能性も否定できない。奥壁は大ぶりの１石とその上の小さな石材が描かれている。石材は玄武溶岩石とされていることから、現存する長者森古墳と同様のようである。石室図面がかなり略測的であるため、正確な石室の様相は不明であるが、長者森古墳に比べると小規模かつ壁面に占める石材１個分の面積が大きく、袖部も退化傾向にある石室であったと考えられる。

文献にみえる出土品（表３）　出土品については『史の友』第１集および第７集に詳細に記されている。これ以降の文献ではこれらに示された内容を要約した記述となっている。ただし、『史の友』第１集と第７集の間には出土品の記述に以下のような若干の違いがある。

まず、土器のうち下層出土の須恵器の全数は変わらないものの、器種の表現が若干異なる。第１集では坩２、杯７、蓋付椀２であったが、第７集では杯９と蓋付坩２となっている。坩２とされたものが最終的には杯に計上されたようだが、当初より杯と呼称されていたものとは形状が異なっていた可能性が考えられる。一方、上層出土の土器については第７集で言及があり、土師器の燈油状皿と杯がある。

次に、鉄器は鉄鏃が第１集から第７集になると、12から16に増加し、釘の項目が新たに加わる。第１集では鉄鏃について破片多数とされており、この接合が進んだことが考えられる。これらの相違は中間報告時点から府教育委員会に報告されるまでの整理作業の進展によるものと考えられる。

このほか、馬具としては銜と鐙（第７集では「鎖状の鉄塊（輪鐙）」と表記）がそれぞれ１点ずつ挙げられている。

上記の文献では、それぞれの出土品の記述に対応する図面番号が記されているものの、対応する実測図等の掲載はなく、所在は不明である。

その後、『京都夜久野の文化財』、『丹波夜久野の文化財』には太田森２号墳出土品の写真が掲載されている。『丹波夜久野の文化財』には、鉄刀３点、耳環６点、管玉２点、須恵器杯および蓋２点ずつの写真が掲載されている。このうち鉄刀は長さがそれぞれ異なり、過去の文献の記述とも一致する。須恵器は、受け部のある杯身とかえりをもつ杯蓋が２つずつ掲載されているが、これらは組み合うものではない。蓋２点は過去の文献で「蓋付盌（坩）」とされた器種に伴うものだが、杯身２点は後述の報告でも述べるように（Ⅱ部４章参照）、他遺跡の出土品と思われる。

なお、『京都夜久野の文化財』にも鉄刀３点の写真が掲載されている。並べ方は異なるが『丹波夜久野』掲載の３点と同一のものである。

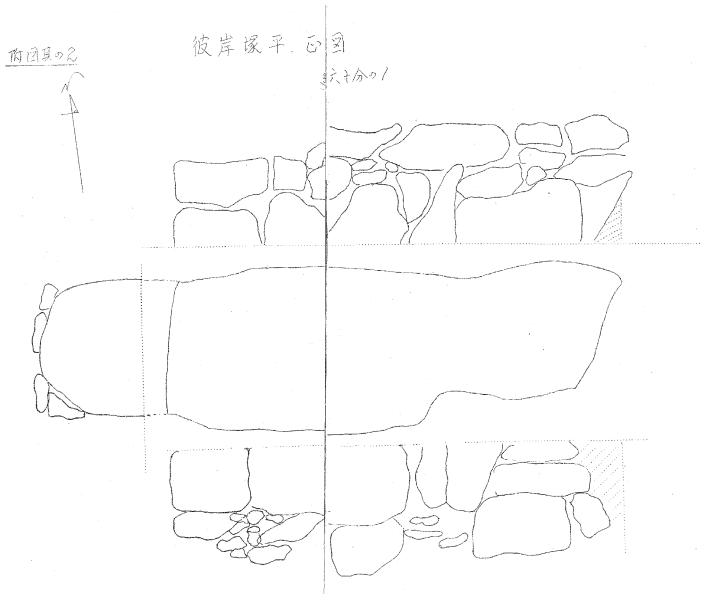

図７　『史の友』第１集掲載の太田森２号墳石室略測図

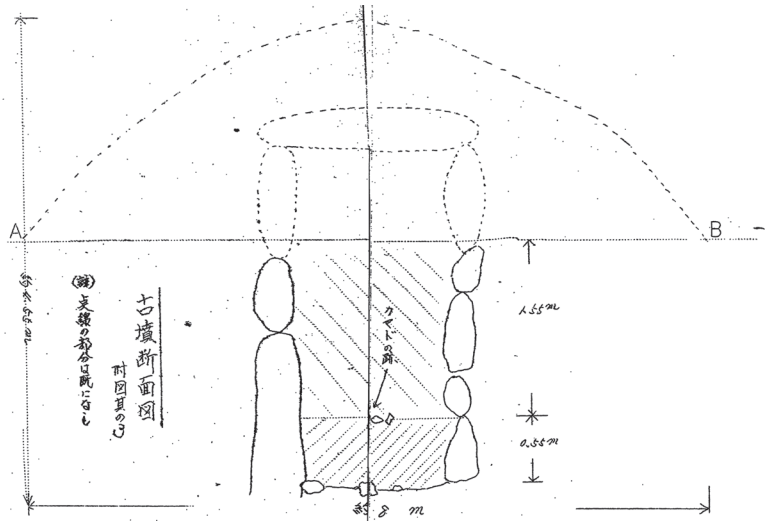

図８　『史の友』第１集掲載の太田森２号墳石室断面図

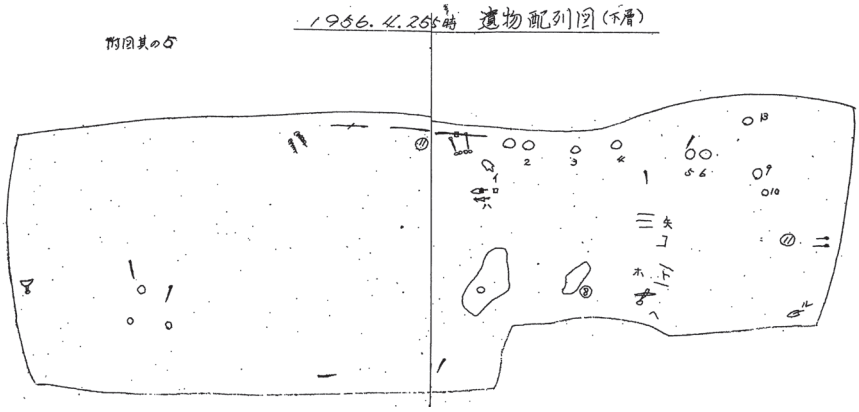

図９　『史の友』第１集掲載の太田森２号墳遺物出土状況図

表３　各文献記録における太田森２号墳出土品についての記述

文献	出土品についての記述	掲載図・写真
夜久野史友会1956 『史の友』第１集	「鉄類＝直刀三本、銜一ヶ、輪鐙一ヶ、（鑑定依頼中）鉄族十二ヶ（原形をとどめるもの）、破片若干、刀子三ヶ 　装身具＝管玉二ヶ、耳環（銅地銀張）六ヶ、 　祝部式土器＝蓋付盌二ヶ、杯七ヶ、高杯二ヶ 　土器＝皿三ヶ　破片多数　　坩＝二ヶ　」	—
天田郡旧中夜久野村1956 『天田郡中夜久野村沿革史（未定稿）』	—	—
夜久野史友会1957 『史の友』第７集	「上層遺物は全て土師器である。第２図に見られる如く遺物はほとんど羨道に発見された。 　土器の型は四種に分けられる。 　○燈油状皿　口径八糎（図５の３）　皿の内底にまるく凸線があり、その内側に沈線が二又は三重に見られるもの。（完全１、破片４） 　○燈油状皿　口径八糎五粍（図５の２）底が丁度ろくろをゆるく廻転させて糸で切り取ったときにできる木目状の楕円文様が見られる。（完全１、破片４） 　○土師器杯（ 図５の１）（完全３、破片１、口径十二糎、甕口径約二十糎破片） 　○下層出土遺物　祝部式土器　鉄器 　蓋　付　坩　二ケ（図４の３） 　杯　　九ケ（図４の２） 　高　　杯　二ケ（図４の１） 　直　　刀　三口（方頭大刀）（四十六糎　五十二糎　三十糎断片） 　刀　　子　三口 　鉄　　鏃　十六本（原形を留むるもの）（図６の１２３） 　馬　　具　銜一ケ（図８） 　　鎖状の鉄塊（輪鐙）一ケ 　装　身　具　管玉二ケ 　　耳環（銅地銀張）六ケ 　釘　　若干　」	—
下夜久野村誌刊行委員会1961 『下夜久野村誌』	「上層遺物は全て土師器である。第２図に見られる如く遺物は殆ど羨道に発見された。 　土器の型は四種に分けられる。 　・灯油用皿　口径八糎（図５の３）　皿の内底にまるく凸線があり、その内側に沈線が二重又は三重に見られるもの。（完全１破片４） 　・土師器杯（図５の１）（完全３、破片７、口径十二糎、口径約二十糎） 　・下層出土遺物　祝部式土器　鉄器 　蓋　付　　二箇（図４の３） 　杯　　九箇（図４の２） 　高　　杯　二箇（図４の１） 　直　　刀　三口（方頭大刀）（四十六糎　五十二糎　三十糎断片） 　刀　　子　三口 　鉄　　鏃　十六本（原形を留むるもの）（図６の１２３） 　馬　　具　一箇（図８） 　　鎖状の鉄塊（輪鐙）一箇 　装　身　具　管玉二箇 　　耳環（銅地銀張）六箇 　釘　　若干　」	—
夜久野町教育研究会1966 『郷土夜久野歴史篇　付地誌篇』	※『史の友』第7集の転載	—
上夜久野村史刊行委員会1972 『京都府上夜久野村史』	「土師、祝部土器多数、直刀三口、馬具（はみ、あぶみ、つりぐさり）装身具（管玉、耳環）等」	—
京都考古刊行会1975 『京都考古』第16号	—	—
京都府立丹後郷土資料館1976 『丹波夜久野の文化財』	—	「太田森２号・鉄器　金環　玉　須恵器」として鉄刀３点、耳環６点、管玉２点、須恵器杯２点・蓋２点の写真を掲載する。
夜久野町教育委員会1981 『京都夜久野の文化財』	—	「大油子・太田森古墳２号、鉄器」として鉄刀３点の写真、「太田森古墳　２号　遺物出土状況」として須恵器杯・蓋、鉄刀、馬具、耳環等の出土時の石室床面の写真を掲載する。
京都府埋蔵文化財調査研究センター1982 『京都府埋蔵文化財情報』第６号	—	—
山城考古学研究会1983 『丹波の古墳Ⅰ―由良川流域の古墳―』	—	—
京都府教育委員会1987 『京都府遺跡地図』第２版	「直刀、刀子、馬具、鏃、釘、管玉、銀環、土師器、須恵器杯・高杯・短頸壺」	—
京都府教育委員会2001 『京都府遺跡地図』第３版	「鉄刀・馬具・鉄釘・須恵器・銀環・管玉」	—
夜久野町2006 『夜久野町史資料編』	「出土遺物は、上層から土師器の皿、下層から須恵器や鉄鏃・馬具・直刀等の鉄器類、管玉や耳環等が出土しており…」	「太田森古墳出土遺物」として杯５点、蓋２点、椀２点、高杯２点の実測図を掲載する。
福知山市2013 『夜久野町史』第四巻（通史編）	—	—

以上から、太田森２号墳の出土品としては、土器は杯が９点（うち２点は形状が異なる可能性がある）、蓋とセットの椀が２点、高杯が２点、鉄器は長さの異なる鉄刀が２本と欠損のあるものが１点、刀子３点、鉄鏃が16点、本数不明の鉄釘、馬具（銜・鐙）、耳環６点、管玉２点があると考えられる。

（２）現存する出土品

2023年12月現在、郷土資料館で展示されている土器は土師器が椀１点、須恵器は有蓋椀が２組、杯身９点[4]、高杯２点である。杯身には受け部をもつものが１点、扁平で皿に近い形状のものが１点含まれる。ただし、後述の報告（本書Ⅱ部４章参照）でも触れるように皿状の杯身１点は土器群のなかで時期が新しく突出している。これは他所からの混入品、本来の出土品と入れ替わっている可能性を指摘しておきたい。なお、上層出土とされる土師器に対応するものは現在確認できていない[5]。

鉄器は保存処理済みのものとしては鉄刀３点、刀子４点、鉄鏃17点（本書ではうち１点を鑿（のみ）状鉄

製品として報告）、木心鉄板装壺鐙１対、鉄製素環轡１点、鉄釘13点が保管・展示されている。このほか鉄鏃等と思われる未処理の破片が多数存在する。このうち鉄刀は本数や長さの情報が現存品と一致することからすべて太田森２号墳出土品と考えてよいだろう。刀子と鉄鏃は保存処理済みの現存品が記録よりも１点ずつ多い。ただし、未処理の破片の存在から、既往の記録には計上されず、保存処理段階で接合したものも含まれている可能性がある[(6)]。馬具は既往の記録で銜・鐙とされたものとそれぞれ対応する。

装身具類は耳環６点、管玉２点が展示されている。このうち耳環は長者森古墳出土とのキャプションが添えられているが、上述のように長者森古墳出土の耳環は別に存在することからキャプションの誤りと思われる。いずれも既往の記録の点数と矛盾しない。

よって、混入品の可能性があるものが若干含まれるものの、基本的には過去の記録で下層出土品とされるものと対応する遺物が現存していると考えられる。

おわりに

以上のように、文献記録の情報を整理し、現存資料と照合させることにより長者森古墳、太田森２号墳の発掘時の状況を現存する出土品と紐づけて示す形で整理することができた。その結果を改めて以下に示しておく。

［長者森古墳出土品］

・須恵器複数点：蓋杯11組が現存　※一部文献で出土品とされる有蓋高杯は現存しない

・馬具（轡）１点：現存

・鉄刀少なくとも１点：鉄刀２点が現存　※うち１点は石切場出土品

・鉄製鉾（素環頭刀子）１点：現存するヘラ状鉄製品とそれに伴う鉄環のことか
　※当初の発掘に伴う出土品であるかは断定できない

・耳環、管玉それぞれ１点：耳環は現存するも管玉は所在不明

［太田森２号墳出土品］

・上層出土土器（土師器）：現存せず

・下層出土土器（杯９点、蓋・椀２点ずつ、高杯２点）：杯身９点、蓋付椀２組、高杯２点が現存
　※現存する杯身のうち１点は他所からの混入品の可能性あり

・鉄刀３点（うち１点は欠損あり）：現存

・刀子３点、鉄鏃16点、鉄釘複数点：刀子４点、鉄鏃17点、鉄釘13点が現存
　※保存処理が行われていない鉄器（破片）が多数保管されている

・馬具（銜・鐙）：現存

・耳環６点、管玉２点：現存

さて、これまで取り上げた文献にはそれぞれの古墳の発掘に係る手続き等の経緯についても記述がみられ、『上夜久野村史』等には1961年に発掘調査が実施された長尾古墳・流尾古墳についても同

表４　文献記録にみえる夜久野の古墳発掘の経緯と経過

古墳名	長者森古墳	太田森２号墳	長尾・流尾古墳
発掘年	1904（明治37）年	1956（昭和31）年３月20日～25日	1961（昭和36）年５月１日～７月31日
発見の経緯	・中夜久野小学校建設に伴って発掘	・夜久野史友会が衣川悦夫氏の畑地で古墳の可能性がある石材を発見 ・1956年２月27日、衣川氏が直刀２口を発見し、史友会に持参	・1961年４月、郷土史研究家（中川淳美・月見修・横山太郎）が夜久野中学校上校移転地で発見
届出の有無	・不明（無しか）	・所轄警察署及び府教育委員会文化財保護課に報告 ・1956年３月５日、府文化財保護課長長谷川主事が視察し、発掘を許可 ・発掘願を提出	・夜久野町教育委員会に通報 ・町教育委員会が現地確認の上、保全困難と判断、府文化財保護課に緊急発掘調査を届出 ・府文化財保護課が調査し発掘を許可
発掘者	・不明	・調査担当者は夜久野史友会員（永井実・井上守・中川淳美・月見修） ・夜久野中学校生徒二十数名が参加	・京都大学文学部考古学教室小野山節助手、府文化財保護課堤圭三郎技師が指導 ・町教育委員会、夜久野史友会員（月見修・中川淳美・横山太郎）、高校生・中学生有志等によって実施
記録	・『史の友』や各町村史等に石室の規模と出土品について記述	・1957年４月、府文化財保護課へ報告書を提出 ・上記報告書の概要を『史の友』等に掲載 ・遺構図に関する略図を掲載	・1969年11月１日付けで町教育委員会から府に報告書を提出 ・上記報告書の概要を『上夜久野村史』等に掲載 ・遺構測量図、出土品実測図等を掲載

表５　夜久野地域の古墳発掘と文化財保護制度の変遷

和暦	西暦	事項
明治７年	1874	太政官から府県へ「古墳発見ノ節届出方」を通達
明治13年	1880	宮内省から府県へ「人民私有地内古墳等発見ノ節届出方」を通達
明治32年	1899	「遺失物法」制定
明治37年	1904	**中夜久野小学校建設に伴う長者森古墳の発掘**
大正２年	1913	内務省から地方長官へ「古墳発掘ニ関スル件」を通達
大正６年	1917	内務省から地方長官へ「古墳及埋蔵物ノ発掘ニ関スル件」を通達
大正８年	1919	「史蹟名勝天然紀念物保存法」制定
昭和25年	1950	「文化財保護法」制定 文化財保護委員長から都道府県教育委員会あて通知「埋蔵文化財の発掘について」
昭和29年	1954	「文化財保護法」改正
昭和31年	1956	**太田森２号墳の発見と発掘調査**
昭和32年	1957	**夜久野史友会が太田森２号墳調査報告書を府文化財保護課に提出**
昭和33年	1958	文化財保護委員会事務局長から都道府県教育委員会委員長あて通知「遺跡台帳の作製等について」→文化財保護委員会による遺跡分布調査（1960～1962）
昭和36年	1961	**長尾古墳・流尾古墳の発見と発掘調査**
昭和44年	1969	**町教育委員会が長尾・流尾古墳発掘調査報告書を府文化財保護課に提出**

様に経緯が記されている（表４）。

長者森古墳の発掘においては、当時の法的な手続きが踏まれたかは不明であるが、結果として古墳が校庭に保存されている。旧来から地域の伝承のなかで守られてきた遺跡であることも大きいが、時期を前後するように古墳の保護や顕彰に関する通知が出されていることとも無関係ではないだろう。しばらく経ち、戦後になると太田森２号墳の発掘調査がおこなわれる。この時には改正により埋蔵文化財の章が追加されて間もない文化財保護法に基づく法的手続きが踏まれているようである。夜久野地域において初めて「発掘調査」がおこなわれたと評価することも可能であろう。一方で、現在知られる文献に町教育委員会の対応が記されておらず、行政というよりは夜久野史友会という有志の力によるところが大きい。調査期間も短く、現在の水準からみて決して十分な調査手法が備わっていたと

はいえない部分もある。そして、わずか５年後の長尾古墳・流尾古墳では、町教育委員会を経由して届出をおこなうという体制ができあがっている。調査も大学教員の指導の下でおこなわれており、調査期間や報告書刊行までの整理期間も十分に確保されている。

このように、本稿で扱った文献資料は、長者森古墳と太田森２号墳、さらには長尾古墳・流尾古墳といった夜久野地域における古墳発掘の変遷を示している。それは発掘当時の遺構の状況を記録し、保管されている出土品との照合を可能にしただけに留まらず、埋蔵文化財保護制度の整備が進むなかで、夜久野地域（旧夜久野町）という一地方の古墳発掘がどのようにおこなわれてきたかを反映している。出土品の裏付け資料というだけでなく、地域の文化財保護の歴史を示す資料としても意味のあるものといえよう。（岡田大雄）

註

（１）後述のように、長者森古墳と太田森２号墳における発掘行為の経緯や過程は異なる性質をもつ。本稿では、便宜上、文化財保護法に基づく届出があったものを「発掘調査」、それ以外を「発掘」として区別している。

（２）『史の友』第７集では、馬具の鐙止めに「さび生ず」と注記しており、直刀に錆が生じているとする『沿革史』とやや食い違いがある。

（３）ただし、羨道長のみは現存長にくらべて１ｍほど長い記述となっている。現在の羨門部は後世の改変も想定されていることから、『沿革史』における羨道長が発見当時を示している可能性がある。

（４）後述の報告（本書第Ⅱ部４章）では無蓋椀・壺類の底部として報告しているものも含む。形状から各文献では杯身に計上されていると判断し、本稿でもそれに対応させている。

（５）現存する椀１点がこれに含まれる可能性は否定できないが、点数が大きく異なることから積極的な評価は避けておく。

（６）太田森２号墳の後年に発掘調査が行われた長尾古墳では刀子と鉄鏃が１本出土したとの記録があり、現在その所在は明らかではないことから、それらが混入している可能性も否定できない。ただし、今回太田森２号墳出土としたものの中に『京都夜久野の文化財』に掲載されている長尾古墳出土の刀子と鉄鏃のクリーニング・保存処理前の写真と完全に一致するものはなかった。

参考文献

中夜久野村（編）1956『天田郡中夜久野村沿革史（未定稿）』

上夜久野村史刊行委員会 1972『京都府上夜久野村史』

京都府教育委員会 1987『京都府遺跡地図』第２版

京都府教育委員会 2001『京都府遺跡地図』第３版

京都考古刊行会 1975『京都考古』第 16 号

京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982『京都府埋蔵文化財情報』第６号

京都府立丹後郷土資料館 1976『丹波夜久野の文化財』

下夜久野村誌刊行委員会 1961『下夜久野村誌』

夜久野町史編さん室 2013『夜久野町史』第四巻（通史編）福知山市

夜久野史友会 1956『史の友』第 1 集

夜久野史友会 1957『史の友』第 7 集

夜久野町史編集委員会 2006『夜久野町史』第二巻（資料編）福知山市

夜久野町教育委員会 1981『京都夜久野の文化財』

夜久野町教育研究会 1966『郷土夜久野歴史篇　付地誌篇』

山城考古学研究会 1983『丹波の古墳Ⅰ―由良川流域の古墳―』

和田勝彦 2015『遺跡保護の制度と行政』同成社

編集後記

本書の執筆・編集には、筆者含めた学生も少なからず携わった。思えば初めて末窯跡群の踏査に参加した時は、山の中で右も左もわからず先輩の背中にひっついていき、落ちている土器に夢中になっていた。後輩を先導する立場になると手元の地図と睨めっこしつつ、採取した土器の記録や、整理作業の日程を考えた。夜久野では先輩方の歩みも蓄積しており、私自身も他分野の先生方との合同踏査や資料の分析、成果報告会の開催などの得難い経験をした。その成果をこうして1冊にまとめ上げる段階に関わることができたことは感慨深い。多くの人と関わり、貴重な資料に触れる機会を得たことに感謝したい。（も）

表紙・裏表紙写真

上左：夜久野末窯跡群の調査風景

上中：長者森古墳

上右：ボーリング調査風景

下　：夜久野末窯跡群の遠景（ナゲ地区）

（以上、菱田撮影）

裏表紙：小倉田古墳出土双龍環頭大刀

（栗山雅夫氏撮影）

京都府立大学文化遺産叢書　第28集

夜久野の後期古墳と末窯跡群

編　集　菱田 哲郎（京都府立大学文学部教授）
　　諫早 直人（京都府立大学文学部准教授）
発　行　京都府立大学文学部歴史学科
　　〒606-8522　京都市左京区下鴨半木町1-5
発　行　日　2024年3月29日
印　　刷　北斗プリント社
　　〒606-8540　京都市左京区下鴨高木町38-2